

パーキンソンの法則

AHK4000 代では「役に立つ法則」について述べます。ここに述べる法則は、数学や科学でいう自然法則ではなく、人間社会が経験的に役立つと知った社会学的法則のことです。その中には数学的根拠に基づいているものもありますが、それらも人類の経験と整合性が良いために経験則として人類の叡智のストックに加えられるものばかりです。学校の通常の学修課程ではまず教えてくれることがない法則ですが、人間社会で生きて行く上で常識として知っておくと、物事の本質を見透せる役立つ道具になるでしょう。

最初のパーキンソンの法則（Parkinson's law）は 1958 年英国の歴史学者・政治学者 Cyril Northcote Parkinson が英国エコノミスト誌（1955/11/19 号）に発表した風刺コラム「Parkinson's law」から始まっています。彼は英国の官僚制度に関する研究を行い、官僚制度(企業の管理機構等も含む) に内包する問題点・非合理性を鋭い観察眼で指摘して、世の共感をえました。日本でも「パーキンソンの法則」が流行語になるほど普及した社会的概念です。

第 1 法則： 仕事の量は、完成のために与えられた時間をすべて満たすまで膨張する

Work expands so as to fill the time available for its completion.

第 2 法則： 支出の額は、収入の額に達するまで膨張する

第 3 法則： 拡大は複雑化を意味し、組織を腐敗させる

凡俗法則： 組織はどうしてもいい物事に対して、不釣り合いなほど重点を置く

第 1 法則も第 2 法則も官僚世界では「時間はあるだけ使ってしまう」「金はあるだけ使ってしまう」という「貴重な資源を使い切ってしまう」点で共通性があります。

ここに記述された文章は比較的厳密な表現となっていますが、これをもっと判りやすい表現に砕いてその後何冊かの著作(私は 3 冊購読しました)を出版しています。その中から、代表的なものを紹介しましょう。

- 役人の数は、仕事の量や有無に関係なく増える。**これは英国の植民地省の役人の人数が、英国の植民地が次々独立して植民地でなくなって行く英国の落日の時代でも、役人の数は増え続けた実績から導き出された法則です。①役人はステータスシンボルとして部下を持ちたがるし、②役人は相互扶助の精神で互いに仕事を作りたがる、のがこうなる原因だと解析しています。かくして役所はどんどん大規模化して不効率になります。一般的に民間企業にはこのような贅沢をする経済的余裕がないために役人病から免れていますが、時として大企業では経営者の目が隅々まで行き渡らないために、役所と同類の大企業病といわれる事態に陥ることがあります。
- 金は入っただけ出る。**大変判り易い第 2 法則です。官僚制度は税金として徴収した歳入の限界まで歳出を膨らませてしまうというのです。官僚制度に限らず、我々も手許に直ぐに使える金(現金・預金等)を持っていると、必要と思う機会に遭遇すると、その限界まで支出してしまい易いのです。流動資産が多数あっても、それらを固定資産に変えておくとか、定期預金や証券等の現金化が難しい資産の形にしておくのが支出の誘惑に負けないための正しい対策です。日本政府は 1994 年より歳入より多い歳出を赤字国債で補填するようになり、民主党政権の現在は毎年約 30 兆円積み上がり、GDP の 2 倍に近い約 900 兆円の国債・地方債を有しています。これは「**金は入るより余計に出る**」で、パーキンソンの法則よりも悪質な国家運営です。
- 暇つぶしは最も忙しい仕事である。**第 1 法則の援用です。彼はその本の中で、暇なオールドミスが 1 通の

手紙を出すのが、彼女にとってどれほどの大仕事なのかを巧みに記述しています。ナポレオンは新しい仕事を最も忙しい人にやらせたといいます。私の会社人経験でも、仕事を沢山抱え込んだ有能な人のところへ、更に多くの仕事が集まる傾向がありました。暇な人にやらせると時間ばかりかかるからです。

- **委員会の定員は5人に限ることが必要で、20人以上になれば運営不能である。**これは全くその通りで、実用性が高い法則です。国際会議でも G5 とか G11 とか G20(G=Gaverment) と銘打ってやっていますが、関係国が5つ以上に多くなると、決まるものも決まらなくなり、結局はその中に非公式の G5 のような話し合いの場で重要な事案が決定され、公式会議はその追認になるケースが多いようです。これは会議のメンバー数にも全く同様に適用できます。
- **内容が難しい事案ほど短時間で議決され、誰にでも判る簡単な事案の審議時間は長くなる。**誰でも口を出せる事案では発言者が多くなり、審議時間が長くなります。凡俗法則の応用です。パーキンソンの引例では、「原子力に関する議題は理解できる人が殆どいないために5分間で採決されてしまうが、役所で使う事務用品などの議題では誰もが一見識をひけらかし、採決に2時間も掛かり、その後で出席者は自分は有益な仕事をしたとの満足感で議場を去る」と辛辣に書いています。
- **ある組織の立派な建造物の建設計画はその組織の崩壊点に達成され、その完成は組織の終息や死を意味する。**第3法則の展開です。発展中の組織は事務所などは間に合わせで仕事最優先で活動しますが、成長が止まると本来の仕事に関係ない建造物を計画する時間と金が備わることなのでしょう。現実そのような事例をよく見掛けます。
- **会議の決議においては中間派の票が最終的に重要であり、しかもそれは会場の議席の配置によっても大きな影響を受ける(中間派の理論)。**幾多の実例から導出された結論のようです。

以上